

九六年度 佐原例会の講演

伊能忠敬との出会い

小島 一仁

日本文化を築いた十偉人

ただいま、ご紹介をいただきました小島でございます。御来場の皆さま方は、伊能忠敬の生涯については、大体、ご存知のことと思いますので、本日は、私が忠敬に関心をもちはじめたから出会ったり、気づいたりしたことを、思い出すままにお話してみたいと思います。お気軽に聞いていただければ有り難いと存じます。

私は、現在、この佐原の浄国寺という日蓮宗の寺の住職をしておりますが、生まれたのは佐原ではありません。八王子です。八王子の小学校を出るとすぐに、旧東京市内の伯母の家にあずけられて、そこで中学・大学時代をすごしました。父は、大正の末年から佐原に住んで浄国寺の住職をしておりましたが、家庭の事情で、私はずっと父母と別れて暮らしていたのです。

一九四二年（昭和十七年）の九月に大学を出ました。卒業式というのは三月と相場がきまっていますが、戦時中だったため、半年くり上げられて、九月二六日が卒業式でした。そして、十月一日には軍隊に入りました。敗戦の翌年、一九四六年の八月に帰還しましたが、八王子の家も、東京青山の伯母の家も戦火で焼けてしまっ行って行くところがありません。それで、しかたなく、父のいる佐原の寺へころがりこんできたのです。そのときから、私は佐原の住民になりました。

戦地から帰還した次の年、一九四七年に、現在の教育制度、いわゆる六三制がはじまりました。このとき、私は、佐原の「新制中学」の

教師となり、その翌年、「新制高校」の発足と同時に、佐原第一高校——現在の佐原高校——に転任したのですが、伊能忠敬先生のおつきあいは、そのときにはじまりました。

佐原高校に着任してから間もなく、五月になると、講堂で、伊能忠敬展覧会が開かれることになりました。これは、旧制中学校のころから、毎年五月に、慣例として行われていたらしいのですが、その準備のために、先日亡くなられた宮沢重義先生と二人で、忠敬旧宅へ行きました。小雨が降っていたので雨合羽を着て、荷車をひいて行きました。旧宅で象限儀や量程車などを借りて荷車に積み、ぬれないように上にシートをかけて、ガラガラと学校までひいてきました。今は文化財になっているのでとんでもない話ですが、当時はそんなことをしたものです。これが、忠敬先生と私の最初の出会いでした。でも、私はまだ忠敬先生に特別の関心を持ったわけではありません。私の頭の中には、戦前の「修身的」な忠敬の偉人像が住みついていて、忠敬をえらいとは思っていましたが、人間的な親しみは感じていなかったのです。

ところが、一九五〇年になって、意外なことがおこりました。突然、毎日新聞社の出版部から、私に、伊能忠敬の伝記の執筆依頼が来たのです。「毎日中学生新聞」と「毎日小学生新聞」の全国の読者たちの投票によって日本の文化に貢献した偉人たちが選ばれたのですが、伊能忠敬が、福沢諭吉や野口英世等と共に、そのベスト・テンに入りました。毎日新聞社では、その一〇人の伝記を『日本文化を築いた十偉人』という一冊の本にまとめることにし、その中の伊能忠敬の伝記を私に書いて欲しいといってきたのです。びっくりしました。そのころ私はまだ三〇才にもならない若輩で、忠敬について研究していたわけでもありませんから——。それに出版計画書を見ると、聖徳太子と夏

目漱石は教育大の家永三郎さん——教科書訴訟で有名な家永さんです——が書く、紫式部は東大史料編纂所の川端庸之さん、野口英世はやはり史料編纂所の小西四郎さんが書く、というように、当時第一線の歴史学者たちが、ずらりと顔を並べています。私は、気おくれがしてしまいました。それで、執筆依頼をたん断ったのです。

ところが、すぐに、私と同じ大学の先輩で高橋碩一という歴史家から手紙が来ました。彼は、当時、すでに洋学史の研究で知られていて、後には、忠敬や佐原と深いかわりをもつことになりました。一九六八年（昭和四三年）、伊能忠敬翁一五〇年祭のとき彼は佐原高校の講堂で記念講演を行い、また一十年前、一九八五年（昭和六〇年）の五月、忠敬先生生誕二四〇年のときには、この場所ですこに立つて講演をしました。で、彼からの手紙には何と書いてあったか。「お前は、佐原の学校で歴史を教えているというのに、中・小学生向き三〇枚の伊能忠敬伝も書けないというのはどういうわけか。それで、佐原の学校の教師がごとまると思ってるのか」というのです。毎日新聞社へ私を推薦してくれたのは彼だったのです。これには参りました。それで、とうとう、書かされることになってしまいました。『日本文化を築いた十偉人』は翌年に出版されましたが、私の書いた「伊能忠敬」は、あとになって考えてみたら、戦後最初の忠敬伝であつたようです。

伊能家文書との出会い

『十偉人』の仕事にとりくんできて、私は、忠敬研究に関して、いくつものことに気づきました。

一九一七年（大正六年）に大谷亮吉という物理学者が『伊能忠敬』という大きな本を書いていて、まだその業績を越える研究はなされてないこと、その後に書かれた忠敬伝のほとんどは、大谷版の引きさ

つしであることがわかりました。また、忠敬に関する研究は、物理学者、数学者、地理学者、科学史研究者など、理科系の学者によってすすめられてきて、歴史畑で忠敬研究を専門に手がけた人は見当たらないこともわかりました。それと、五〇歳出府以前の忠敬の生活については、大谷版でも、ほとんど明らかにされていないことにも気づきました。そんなことから、忠敬についての関心が深まり、時おりは、忠敬旧宅に顔を出して、地図等を見せていただくようになりました。

当時、忠敬旧宅には、伊能こうという品のよいおばあさんが一人で住んでおられました。いま、そこに坐っておられる伊能洋画伯の御祖母様です。まだ忠敬記念館はありませんでしたので、見学にいくと、このおこうさんが忠敬の書斎といわれている座敷に地図をひろげたり、測量日記を出したりして説明して下さったものです。おこうさんは、一九五四年（昭和二十九）に八八歳で亡くなりましたが、忠敬の遺品を守り、忠敬の業績を世に伝えるために、大きなはたらきをなさった方でした。

おこうさん亡きあとは、その息子の康之助さんの奥さん、多嘉子さんが忠敬や伊能家先祖が残したものを守ることに力を注がれました。

一九五五年（昭和三十）の春、私は、伊能多嘉子さんのご案内で、忠敬旧宅の土蔵の中に入れていただきました。当時金沢大学史学科の学生であつた浅野祐さんも一緒でした。私は、ここで、はじめて、膨大な伊能家文書と出会いました。棚の上には、「伊能景利日記」「旌門金鏡類録」などの記録類をおさめた桐箱がいくつか並べられており、その下の大きな長持の中には、古文書がぎっしりとつまっていました。まことに、質量ともに驚くべきものでした。そして、その年の夏休みには、当時金沢大学の教授であつた遠藤元男さんが、浅野祐さんから数人の学生と共に佐原に滞在して伊能家文書の調査、整理にあたりまし

た。私もお手伝いして、一所懸命カードをとりました。ずっと後に、佐原市教育委員会の高森良昌さんが中心になって、『伊能忠敬関係資料目録』（一九八七年）や『佐原市古文書資料目録』（一九九二年）がつくられましたが、それらは、この時の調査カードを土台としたものです。

私が、伊能家文書から学んだことは、とても、ここで言いつくすことはできませんが、特に、忠敬に直接関することだけを一、二あげておきましょう。

まず、忠敬研究の根本史料である忠敬自筆の書状、『旌門金鏡類録』『伊能豊秋日記』などを、実物ではじめて見ることでできたのは大きな感激でした。それと、伊能景利という人物を「発見」したのは忘れられないことです。景利は、伊能忠敬の妻みちの祖父にあたる人ですが、大変な人物です。

伊能景利は、江戸幕府の元禄期国絵図の作製にあたってこれに協力し、佐原村の測量を行い、村絵図をつくって提出しています。また、『部冊帳』をはじめとして膨大な記録を編集、筆写し、特に四五歳で隠居してから数年の間に、その大部分をまとめていることが注目されます。それらのことから、景利が忠敬に多大の影響を与えた人物であることがわかりました。また、忠敬が二九歳のときにはじめてまとめた記録で「佐原邑河岸一件」というものがあることもわかりました。それらのことは、大谷亮吉さんも、全く気づかなかったようです。

なお、伊能家には「家牒」という先祖書きがあります。これは伊能忠敬の前代の伊能長由という人までは同じ人の筆で書かれています。伊能忠敬から現在まで、つまり去年亡くなされた伊能敬さん（第一六代）までは筆跡が変わっています。これはどういうことなのかと伊能多嘉子さんにお聞きしたことがあるのですが、驚いたことに「忠敬か

ら後は私が書きました」と言うのです。おこうさんというおばあさんと呼ばれて、「あなたがこの後は書くんですよ」と言われた。そしておこうさんの持っていた材料を示されて、先祖書きまで多嘉子さんが書いているのです。そういうふうに関心で伊能家の記録が守られて、現在にも大変役立てられているということを特に皆さんにお知らせしておきたいと思います。

小説家と忠敬

そうこうしているうちに、伊能忠敬の伝記を書くようにという依頼が講談社から来ました。毎日新聞のほうはずか三〇枚でしたが、講談社からの依頼は『世界偉人伝記全集』というので、五〇冊のうち伊能忠敬についての一冊を私に受け持ってほしいという話です。このころになると私もいくらか欲が出てきて、断りませんでした。やりましようということので始めたのですが、これが大変な仕事で、一冊書くのに三五〇枚、三年ぐらいかかってしまいました。

講談社の注文は子ども向けということで、フィクションを使っているべくおもしろく書いてくださいというわけです。しかし私は小説家ではないので、そんなものは書いたことがありません。そこで考えたことは、小説家なら伊能忠敬をどういうふうを書くのだろう、そういうものがないかと思って調べてみたのですが、伊能忠敬を主人公にした小説は一冊もありませんでした。主人公どころか小説の中には脇役でも出てきませんでした。

その理由は後でわかりました。それは戦後の一九七〇年代ごろになって、小説家で現在も活躍している井上ひさしさん、亡くなった松本清張さんの二人が同じようなことを言っています。伊能忠敬は人間のおもしろみに欠けるということです。というのは今は違うと思いますが、

一九七〇年代当時には井上ひさしさんや松本清張さんの頭の中には修身的な伊能忠敬像が住んでいたと思うのです。私がおもしろくないと思ったのと同じような像が、井上さんにも松本さんにもあったと思います。正直なところ、修身的な忠敬像では小説になりません。そういうことがあって、小説家は彼を取り上げなかったのではないかと思いました。

伊能忠敬を主人公にした小説としてはいまだに井上ひさしの『四千万歩の男』しかないのですが、その当時はまだ彼にそれを書く気はまるでありませんでした。NHKで脚本を書いて、一度伊能忠敬に目を付けたけれども、案に相違してつまらない人物だったと書いています。それでやめてしまったわけですが、その後、あの人はまた勉強しなおしたのでしょうか。

でも、何か作家が書いたものがないかと探したら、小説ではありませんが、幸田露伴が三回にわたって書いています。まず、一八九三年(明治二六年)に『伊能忠敬翁』という表題の子ども向けのものを書いておられます。それから六年後の一八九九年(明治三二年)に『少年読本・第一三編・伊能忠敬』というのを書いておられます。子ども向けの本だと思えばかいたらとんでもない話で、文語文で難しいのですが、子ども向けなので全部に振りがなが振ってあります。

これを何回も読み返してみましたが、さすがに幸田露伴だと思いました。というのは、これは国定教科書の前に書かれたものです。国定教科書は一九〇五年(明治三七年)ですが、国定教科書が定まってから後にできた伝記は国定教科書の影響を強く受けてしまっているのです。あまり客観的でない記述が多いのです。やたらに偉人にしてしまうという形です。ところが幸田露伴の場合は人柄もあるでしょうが、国定教科書の前に書かれたということもあって、書き方がかなり客観的です。

たとえば伊能忠敬の小さいときのこと、つまり九十九里の小関という村で生まれて、小さいときに母親に死なれてずいぶん苦労したという伝説があるのですが、たいていの伝記はそれを強調しています。しかし露伴はちがいます。「忠敬先生が幼かったころのことについては三次郎と呼ばれたことのほか、語るべきことはない。先生といえども、幼いときには、ふつうの子どもと同様に遊びたわむれて日々を送っていたのであろう」というように書いています。幸田露伴という人は大したものだと思います。

そのほかに気がついたことは、忠敬という名前に「チュウケイ」と振りがなが振ってあるのです。「タダヨシ」となっているところもあります。それから忠敬の息子の景敬カゲタカにも振りがなが振ってあって、「ケイケイ」としてあります。ほかの人物、たとえば高橋至時先生ヨシトキを高橋ムネトキと書いてあります。現在では伊能タダタカという呼び名が正しいということが常識になっていますが、明治の中ごろにはまだタダタカという呼び名が一般化していなかったのではなからうかというのが一つの発見でありました。

戸籍には現在でも振りがなは振りません。振りがなを振ってしまうと、振りがなを振ったのが戸籍になってしまうのだそうです。だから読み方がわからない名前がずいぶんあります。忠敬の息子の景敬を私どもは「カゲタカ」と呼んでいて、それでいいのではないかと思っています。のですが、先年亡くなった伊能家の伊能権之丞さんから伺ったところによると、景敬というのは「カゲタカ」ではなくて「カゲユキ」と呼んだのではなからうかということをおっしゃっているのです。どうも本当のことはよくわかりません。ともかく現在は「タダタカ」ですが、しかしそんな早くから「タダタカ」という呼び名が定着していたわけではなかったのだらうという感じがします。

そこで忠敬を初めて小説に取り上げたのはだれなのかというと、一九七〇年に一色次郎という方が『朔風の鐘』という小説を書いております。この方は私より年長で、現在、確か八〇歳ぐらいになる方です。戦後、太宰治賞を受けた作家です。この小説は常陸の谷田部の名主でいろいろな発明をやっては失敗していた飯塚伊賀七という地図師と、伊能忠敬と間宮林蔵の三人を組み合わせて小説にしたものです。どれが主役なのかわからないのですが、読んだ感じとしては伊賀七の娘さんが語るといふ形の小説なので、伊賀七という人が主役になっているようです。その中に初めて伊能忠敬が登場するわけです。

ところがこの人は伊能忠敬を小説に登場させただけあって、修身的な忠敬像は描いていません。その言葉だけを引くとちよつと問題があるのですが、こういうふうに言っています。「酷薄非情、目的の達成のためには容赦なく物事を処理なさったと人の噂に残るほどの先生であつた。」という言い方をしています。忠敬は娘のおいねさんという人を勘当しております。おいねさんといっしょになった養子の盛右衛門というのが経済的な失敗をしたということで、それを離縁する。ところがおいねさんはその盛右衛門についていこうとするので、忠敬さんはおいねさんを勘当する、というようなことをやっております。

それから次男の秀蔵という人がいますが、この人は素行が悪かったというので追放してしまします。弟子たちの中にも破門された人が、平山郡蔵など何人もいます。そういうふうに思い切つてさつと切り捨ててしまふ。だから酷薄非情だというわけです。これは少し言い過ぎではないかと思うのですが、しかし決して一色次郎は伊能忠敬を悪人のように書いていないのですが、ともかくそういうような形で取り上げているわけです。

「四千万歩の男」から

七〇年代の終わりになって初めて井上ひさしさんが『四千万歩の男』で、伊能忠敬を小説の主人公として取り上げました。このときちょうど私は三省堂で出した『伊能忠敬』という小さな本の原稿を書いているところで、井上さんが『週刊現代』に『四千万歩の男』を連載はじめたので、関心があつたのですぐ読みました。

ところが見たとたんに、つまらない間違いをする人だなと思いました。それはどういう間違いかというと、これは不思議なことですが、有名な偉い人がごく簡単な間違いをしてしまふんですね。佐原の伊能家のことを、「上総第一の名家」と書きました。これは上総ではなくて下総です。後で話しますが、松本清張さんは「房州佐原」と書いています（笑）。

人の悪口を言うわけではなくて、よく気をつけないと実は私自身も間違えているんです。何を間違えたかというと、三省堂で『伊能忠敬』を書いたときに、幸田露伴の文章を引用しました。原稿を書いているときは『幸田露伴全集』を側において見ながら書いていたのですが、徳富蘇峰と書いてしまったんです。そういうとんでもない間違いをするものなんですね。

しかも、言われるまで気がつかなくて、数年たってから気がつきました。どこで気がついたかというと、井上ひさしの『四千万歩の男』が講談社から単行本になって出ました。そのときに、私の作った伊能忠敬の年表を使わせてもらいたいというので、「結構です」ということで向こうで使ったわけです。そのお礼として『四千万歩の男』の下二冊を送ってきました。それに「歴史小説ハンドブック」という薄い冊子がついていて、尾崎秀樹さんが書いています。伊能忠敬の研究史などについても簡単に書いてあって、その中に私のことが書いてあ

るんです。小島のこの本は啓蒙的な本で、私も啓蒙を受けるところが多かったです、とそこまではよかったんですが、「だが、どうも徳富蘇峰と書いてあるのはおかしいのではないか」ということで(笑)、ドキッとしました。あわてて自分の本を見たら「あっ、こんなことが書いてある」と、このときはびっくりしました。早速尾崎秀樹さんに、「とんでもない間違いをしました。改版のときには直します。」という手紙を出しました。

でも尾崎秀樹さんが気がついてくれたからよかったのですが、気がついてくれなければもっともっとその間違いが続いていたのではないかと思います。小説家であろうが、歴史学者であろうが、政治家であろうが、自分が気がつかないところでもない間違いをやるということはよくあることなので、それ以後はなるべく物事は慎重にやろうと思ってはいますが、私は元来人間が慎重ではないのでよく間違えるようです。話を元に戻しますが、上総と書いてあるのでつまらない間違いをするなと思ったけれども、いつまでもこのまま活字になっているのは困ると思って、井上ひさしさんに上総というのは直したほうがいいという葉書を書きました。それまで全然面識がなかったのですが、すぐに返事がきました。このときの返事は本当はあまり男らしい返事ではなかったんです(笑)。これは誤植だというわけです。上と下の誤植などというのはあまり聞いたことがないのですが、それはそれでいいことにおきました。

ところが続けて読んでいくと、またおかしいところが出てきました。それは伊能忠敬の息子の景敬という人について、「愚に近い」と書いてあるのです。要するに愚者だということです。文章を引くと、「正直って、この子は愚に近いが、自分の留守中に身代をつぶしてしまったりはせぬか……」というふうに忠敬が心配したと書いてあるのです。

私の調べたところでは、伊能景敬という人はもちろん忠敬ほどの人物ではありませんが、愚に近いなどという人物でもない。なぜならば、伊能家の資料の中に『旌門金鏡類録』という四部にわたる大きな記録があります。この編集を主として行ったのが伊能景敬であろうということは中を読んでみれば気がつきます。一人称で書いてある部分は全部景敬のことですから。それから伊能忠敬の知らないことがたくさん入っています。そういうことから、この『金鏡類録』というのは伊能景敬が編集したものであろうと私はおもっています。

その『金鏡類録』を見ていくと、終わりのほうに、佐原で殿様の税の取り方が悪いということで百姓一揆が起こりかけたことがあるのですが、それを彼が非常に手腕を発揮して一人も処罰者を出さないでおさめているわけです。だから愚に近き者などということはないんです。

ただし、忠敬は息子をあまり気に入ってはいなかったようです。手紙でも批判しています。息子の三郎衛門は名聞(ミカウモン)(うわべの名誉)を好むようなところがあって、私に似ていないと言っています。あまり好きではないんですね。そういうことはあるけれども、だからといって景敬が能力のない愚に近き者であったなどということはとうてい言えないと思います。

そこで私はそのことを、われわれのやっている香取歴史教育者協議会という会の「香取通信」というガリ版刷りの機関紙に書いて、それを井上ひさしさんに送ってやったのですが、またすぐに返事が来しました。それまで私は井上ひさしという人は書くものから見てもあまり几帳面な男ではないように思っていたのですが、出したらずに返事が来るんです。それも原稿用紙に一字一字ちゃんと字を入れて書いてくるんです。あれは丹念な人ですね。(つづく)

(こじま かずひと・佐原市史編纂委員長)

九六年度 佐原例会の講演

伊能忠敬との出会い (承前)

小島 一仁

「四千万歩の男」から

ところが読んでみると、向こうは思い違いをしたらしいのです。つまり、この小島という佐原の住人は郷土史家かもしれない。井上ひさしが佐原の伊能家の悪口を言ったものだから、けなされたというので怒っている、というふうに思ったらしいのです。それですぐ手紙をよこしました。どう書いてあったか。「あなたは伊能家および伊能忠敬のことについて調べるのに、伊能家の資料ばかり調べている。あなたはやたらに『旌門金鏡類録』という資料を振り回すけれども、それは伊能家の名譽のために書かれたものであって、伊能家に都合のいいことばかり書いてあるのだ、私はそういうものは信用しない。」ということです。

それでは井上ひさしがどこから愚に近き者というのを導き出したかという、水戸の学者で小宮山楓軒という漢学者がいました。忠敬より十九歳か二〇歳ぐらい年下で、ほぼ同時代の立派な学者です。この人の書いた日記兼随筆のようなものに『懷宝日札』というものがあります。その中に、「息子の三郎衛門は愚に近き者なれど、財産を譲りて少しも惜しまず」、つまり非常に愚か者であるけれども、伊能忠敬はそれに全財産を譲って少しも惜しまなかったという部分が確かにあるんです。「これは伊能家に味方しているわけではなくて、偉い学者の書いたものだから客観的な事実である、あなたは間違っている。」と真っ向から反論してきたわけです。

そこで、そう言われるならこちらでも反論しなきゃいけない(笑)、というのでやったわけです。あなたは、「金鏡類録」は伊能家の味方ばかりしていて信用できないと言っけれども、確かにそれは伊能家の名譽を高めるために書いたものだから、伊能家の悪口は言わない。けれどもその中に佐原および伊能家に関する重要な事実が含まれているということをあなたは知らなければいけない。これが第一点です。

もう一つは、あなたは小宮山楓軒の「懷宝日札」を金料玉条のようにこれは正しいと言っているけれども、そうではない。それは小宮山楓軒がすでに伊能忠敬は偉いという頭があって書いているのだから、それは事実を示しているものではなくて、小宮山楓軒の思想状況がそこに記されているにすぎないのだ。要するに資料批判というものはそういうふうにはやらなければいけないのだ。どの資料がよくてこっちが駄目だというのではなくて、資料を扱う場合にはその資料批判をして、正しく使うということが重要ではないのか、と反論しました。

そうしたらまたすぐに返事がきました(笑)。しかし「金鏡類録」の編集が伊能忠敬であるとか、百姓一揆をおさめたとかいうことは彼が全然知らないことだったからびっくりしてしまっただけです。結局、三、四回手紙のやりとりをしたのですが、このときは私は非常に爽快感を味わいました。向こうも気持がよかったようで、最後に来た手紙の結びにこう書いてありました。

「未知の学究と学問についてこうやって手紙のやりとりが可能だとは、そして自分がそれによって高められていくとは、この浮世もまんざらではありません。その意味でもあなたに感謝しております。」

私もおとなげなかったんですがね(笑)、そんなことを論争したってしょうがないんだけど、しかしこの人は非常に気持がよかったんですね。第一、一番気持がよかったのは手紙を出したらすぐに返事

をくれたということです。そして、「何月何日午前二時」なんて書いてます（笑）。そういう点でもこの井上ひさしという人は誠実な人であると思いました。

なお「四千万歩の男」が単行本になってからのを見たなら「愚に近き者」というところはなくなっていました。

小説家というのとはなかなかすぐに返事をくれないんですよ。嫁にいった私の娘は高校時代に笹沢佐保のファンで、やたらに読んでいました。ところが笹沢左保が茨城県の麻生にかなを振って「アザブ」と書いたんです。そこで娘が、あれは地元では「アソウ」と言っています、という手紙を出したら、すぐに返事が来ました。私はこういうもので調べたのだが、それに「アザブ」とかなが振ってあったので、いきなりそれを信じてしまった。しかしあなたの言うほうが正しいのではないか、という手紙をくれました。これも感心しました。

だけど、笹沢左保さんの場合は普段はファンから手紙が来てもすぐに返事を出さなかったのだそうです。NHKの「日本史探訪」か何かで笹川に、さっき言った高橋氏と二人で笹川繁蔵を取材に來たことがあるんです。そのときに高橋氏から私の所へ電話がかかってきて、笹川に笹沢左保が来ている、娘さんから手紙をもらったそうだから娘さんを出してくれ、というわけで娘を電話口に出しました。そうしたら普通は返事を出さないんだけど、あのときは虫の居所がよかったせいかすぐ出しちゃったんだということで、後で向こうで大笑いしたそうです。「よかったねえ、出しておいて。あれで出さなかったら小島にこてんこてんに怒られるところだった」なんて、そんなことがありました。

松本清張の忠敬論

話は戻りますが、その後、松本清張さんが『文藝春秋』で伊能忠敬を取り上げました。今から一二年前の一九八四年の一〇月から二月にかけて三回にわたって、表題は「老十九年の推歩」、一九年というのは測量をやっている期間が十七年で、後の二年間は地図を作っているから一九年になります。推歩というのは計算すると言うような意味です。これは「松本清張短篇小説館」と銘打っておりますが、小説ではなくて伝記でもないし、一つの研究みたいなものです。これに「房州佐原」が出てきたんです。

ただ、松本清張が三回を通じて言っている中で強烈に私に響いたのは、佐原の酒屋の主人であった伊能三郎衛門と、江戸へ出てからの測量家としての伊能忠敬とは全く区別して考えなければならないという考え方です。簡単にいえば佐原は測量や地図には関係ないということです。測量には深川の黒江町の家から出ている。帰ってきて地図を作ったのも深川で、後には八丁堀の亀島町に移ったが、要するに江戸で仕事をやっている。佐原では地図に関する仕事は何もやってない。旧宅に伊能忠敬の書斎というのがあるけれども、江戸へ出てからあそこへ帰ってきて地図に関する仕事をやったということは資料の中には全然出てこないというわけです。

松本清張は一九三二年（昭和七年）の文部省の「史蹟報告書」を読んで書いているようなのですが、「文部省の役人は佐原でも地図の仕事をしたかのごとく書いている、これはさかしらの筆である」などと言います。私はこれを読むまでそういう議論は聞いたことがありません。測量家伊能忠敬は佐原とは全く関係がない、こういうふうに正面切ってズバツといった人は今まで一人もいなかったと思います。私は松本

清張のファンですから、そういう点ではさすがに松本清張らしいと思いました。

もちろん私はそれには反対ですよ。とんでもない話だ(笑)。伊能忠敬は佐原へ来たからこそ後の測量への道が進んで行けたのであって、佐原を抜きにして伊能忠敬の生涯を考えることは絶対にできない、というのが私の考え方ですから、そういう点では松本清張とは真っ向から対立するのですが、しかし清張自身が自分の思うところをズバッと言ったということについては、いかにも清張らしいと思います。

それはそれでいいのですが、実はこの松本清張の文章には「房州佐原」のような間違いがやたらにあります。佐原のことを昔は城下町であつたかのごとく書いているんです。そして岩ヶ崎の城を佐原の城か何かと間違えているんですね。「岩ヶ崎城の築城をした。土民、これより参集した。」などと書いてあります。そしてそういうことばがあるかどうか知らないけれども、佐原のことを「廢城下町」城下町でなくなつた町と書いてあるんです。これはとんでもない間違いです。

それから測量器具などをしまつてあるのが、旧宅の小門を出て真っ直ぐに行つたお蔵の中であると書いてあります。つまり土蔵と記念館をゴッチャにしてしまつていゝんです。それから佐原の小野川のところに「出し」(船をつける場所)があると、「出し」がいまだに一軒一軒の前についているかのごとく書いています。今はその「出し」で洗濯する人もない、などと書いてあります。

彼は佐原に取材に来ているはずなのですが、実は私は松本清張は取材に来なかつたのではないかと思ひました。つまり彼がこの文章を書く前に、『文藝春秋』の編集者が二度ばかり私のところへ来ているんです。松本清張さんが伊能忠敬について書くことになつたから、いろいろ教えてもらいたいこともあるからというので、二度ばかり取材に来

たんです。それで向こうの聞くことについては答えました。しかし松本清張さん自身は来なかつたのではないかとこの文章を見て思ひました。ところが実は後に来ているらしいことがわかつたので、何だか狐につままれたようです。

それで結局この問題はどうかといふと、『文藝春秋』のほうからその雑誌を毎号送つてきて、最初の号が来たときに電話がかつてきました。「いかがだつたでしょうか」といふので、これはとても電話では話せない、めんどろだけれども手紙で書くからそちらで読んでくださいといふことで、ここがこつこつうふうにおかしいと、一生懸命に手紙を書きました。それは佐原の駅でだれかに会つたときに、『文藝春秋』に松本清張があんなことを書いたけど、なんとか言わなきゃ駄目じゃないか、とけしかけられたせいもあったんです。そして最後の結論を何としたかといふと、松本清張さん自身がこんなくだらない間違いをするはずがないと私は思う。だからこれはどなたかが代筆をしたものではありませんか、といふふうな手紙を編集部へ出しました。

ところが井上ひさしさんと違つて、とうとう返事は来ませんでした。ただ、いくらかそれを書いた効果があつたかなと思ふのは、第二回目のときに、やたらに私の三省堂の『伊能忠敬』という本からの引用が多くなつたんです(笑)。佐原の町にいくら自由の雰囲気があつたと書いてあるのはこの本だけであるとか、忠敬が伊能家に入ったときに没落しかかつていゝなどというのはおおげさな言い方であるとか、そういうことをこの本はわかりやすく書いていゝ、などといふことまでやたらに入れてあるんです。だからこれはいくらか変な効き目が出ちゃつたなと思つて、あんまりいい気持はしなかつたんですがね。

悪妻伝説

それにしても井上ひさしさんや松本清張さんは、どうも伝説をそのまま事実であるかのごとく小説に書くということがあるようです。この会の機関誌の第八号に私が伊能忠敬の奥さんの手紙を紹介させていただきましたが、あの手紙などで見ると、どうも奥さんは悪妻ではないんです。ところがおみちさんという奥さんは家付きの娘でいばっていて、すごい悪妻だったというのが伝説になっています。

たとえば忠敬と向かい合って食事をしていたときに、何が気に入らないのか「あなたは私と一緒にご飯を食べるような立場ではないから、台所へ行って召使と一緒にご飯を食べなさい」と言ったというんです。すると忠敬は「従容自若^{しづようじじやく}として……」従容自若といっても今の若い人にはわからないと思いますが、動ずるふうもなく静かに立って台所へ行って召使と一緒にご飯を食べた。伊能忠敬と言う人はそういうふうになんか小難しいことにはこだわらない大人物であった、ということ強調したいわけです。そのおかげでおみちさんは悪妻にされてしまいました。息子の伊能景敬もそうです。これは偉人にはつきもので、周りの者を愚か者にしたり悪者にしたりすることによって、その人物が偉いことを際立たせるわけです。このおみちさんなどはその被害者です。

しかし、これも本当におみちさんが良妻賢母であったのか悪妻であったのかというところは決め手がなかったのですが、伊能家のお蔵を修理するときに多嘉子さんが中をもう一度よく見てくれというので洗いだらい調べたら、おみちさんの手紙が出てきて、その手紙によってよくわかりました。夫思いで、夫を立てて、しかも伊能家の名譽を守ろうという気持が非常に強かった女性であるということがわかったと同時に、手紙の中でおみちさんが忠敬に対して、こういうことがあったけれども、あなたは江戸から帰って来たら私を叱らないでくださいよ、とい

うことをやたらに書いています。ということは、やたらに忠敬が叱ったということで（笑）、怒りやすかったということは間違いないようです。

それなのに、伝説を使ったほうが小説としてはおもしろいのでしょうか。そういうことで伝説がそのまま事実であるかのごとくに小説家によって書かれる。これは大変な問題です。つまり、伝説というのはほうっておけばそのまま忘れられていきますが、高名な小説家が小説に書く事によって、それが事実であるかのごとく再生産されていくのは非常に困ると思います。

おわりに

こんなとりとめの話をしていたらきりがありません。時間でするのでこの辺で締めくくらないといけないのですが、別に締めくくりの言葉もありません。ただ、これからの忠敬研究ということで、私が三省堂の『伊能忠敬』を書いたときに非常に痛切に感じたのですが、あんなに小さな本であるのに反響が大きくて、南は鹿児島から北は青森あたりから読んだという手紙がどんどん来しました。そして感想を聞かせてくれるだけではなくて、私のところにはこういう資料もあります、などということ言ってくる人があるんです。伊能忠敬という人は全国を歩いているだけに、伊能忠敬に関心を持っている人が全国に非常に多いのだということを感じました。

そういうときにこの伊能忠敬研究会ができたことによって、資料をお互いに紹介しあうことができるのか、あるいは今まで知らなかった研究を知ることができるのかということはきわめて有意義だと思います。この研究会ができてからまだいくらかも経ちませんが、私は研究上ずいぶん得をしたことがあります。

たとえば河崎さんという金沢の高校の先生をしている女性が、この会ができたのをきっかけに佐原へお出になって、私もお目にかかりましたが、この人が加賀藩での忠敬の測量について非常に具体的なことを明らかにしています。大谷さんの本にも忠敬が方々を回ったときに隠密ではないかと疑われたなどということが書いてある部分がありますが、加賀藩では実際に、忠敬から隠密がましき質問があったら答えるな、という藩の命令が出ています。そういう命令が出ているものだから、忠敬があつたの道を行ったらいいのか、などということも聞いても答えてくれないうです。そんなことがはっきりわかります。そういう点でも忠敬はずいぶん苦労したのでしょう。

しかしそれ以上に私が不思議に思っているに分からないのは、加賀藩へ行く前に糸魚川という所で、相手が非常に不親切な案内しなかったというので忠敬が叱りつけたことがありました。そのために現地の連中が殿様に言って、殿様から忠敬がいばっているということとを江戸幕府に通報されて非常に困ったことがあります。そういうふうな忠敬は厳しい人で、間違っていると思うと相手をやっつける。これが忠敬の姿だと思うのですが、加賀藩では忠敬はおとなしくて、相手が説明してくれないと「そうか」ということで行ってしまうんです。これは藩から直接の命令が出ていることを知っていて、あまりとがめだてしなかったのかなとも思います。でも忠敬の気質としてはおとなしすぎる、というような感じもしました。

それからこれは機関誌の八号に安藤由紀子さんが書かれていますけれども、坂部貞兵衛（忠敬が片腕とたのんだ測量のベテラン）が五島の福江島という所で亡くなって向こうに葬られています。五島では伊能測量隊は手分けをして測量したのですが坂部貞兵衛は日ノ島測量中に病氣にかかりました。彼が日ノ島から別の島にいる忠敬に出した手

紙があります。その手紙にはこんなふうに書いてあります。

「この島の宿は大きな家ですが、古い家で先日的大雨で座敷中雨もりがして寝るところにも迷いました。便所は十四、五間もはなれていて高い縁側をやっと下りて通らねばなりません。また、寝床のまわりを数万のアリが行進しています。」こんな所に泊まったのか、と思います。つまり、測量旅行中は忠敬とか坂部貞兵衛などは身分がいいので、床の間付きの部屋に泊まっている、などということがほかの資料にもたくさん出てきます。だからいつでも泊まりはふんわりやっただろうと思うと、とてもない話なんです。坂部貞兵衛ほどの身分のある人が、数万のアリが行列するような所に病中、寝ていなければならなかったのかということを見ると、大変だったのだなと思います。

坂部貞兵衛でさえそうですから、内弟子やもっと下の人たちはどんな思いをしたのだらうと思います。坂部貞兵衛は「いよいよ明日日ノ島出立にあいな候とまずうれしく存じた」というようなことを言っています。本当にそうだらうと思います。

こういう具体的な資料が全国から発掘されて紹介されるならば、伊能忠敬像はますます豊かになっていくのではないだらうかと思います。今日ご来場の皆様も、忠敬に関するどんな小さな情報でも結構ですから機関誌へお載せくださるようお願いしたいと思います。ごく小さなことでもそれが大きなものにつながっていく場合がよくあるので、小さなことだからといって軽視することはできません。

ではこれで終わらせていただきます。